

中部の

エネルギーを 築いた



津電灯に貢献した川喜田四郎兵衛と
川喜田久太夫

中部地方で一番早く文明の明かりがしたのは、1886(明治19)年、津市の三重県庁で白熱灯とアーク灯がともされた時である。当時、伊勢新聞には「電気灯を庭前に点灯されたるを以って庁内あたかも一個の不夜城を見るが如く其の光景言わんかたなし」と報道された。これらを指導したのは、後の名古屋電灯の技師長となった丹羽正道で、名古屋栄町の名古屋区役所会議室でも同様の点灯実験を行った。この10年後の1896(明治29)年、津電灯(株)が

資本金3万円で設立された。市内現住者に限り株式を募集し、創立当初から津商業会議所会頭を勤めていた川喜田四郎兵衛が15年余に亘り経営に携わった。その没後、川喜田久太夫が引継ぎ、1922(大正11)年、津電灯(株)、松阪水力電気(株)および伊勢電気鉄道(株)の3社が合併して三重合同電気(株)の社長に就任した。

今月号は、電気事業以外に地元三重県を中心に金融界、商工業の発展などに貢献した川喜田四郎兵衛と川喜田久太夫を紹介する。

津電灯と川喜田四郎兵衛

(1) 津市を中心にした事業活動

川喜田四郎兵衛は1854(安政1)年、代々、米穀、肥料、酒類を商う商家の長男として生まれた。大阪で3年間修業した後、1874(明治7)年に家督を継ぎ、津連合会町会議員、三重県商法会議所副会頭などを勤めた。

津商業会議所が1893(明治26)年に創立され、125名の会員有権者に推され会頭に就任した。

なお、1928(昭和2)年に商工会議所法が施行され、津商工会議所と名称を変えた。また1896(明治29)年に関西製糸(株)が津市に設立され、初代社長に就任した。「明治39年三重県統計書」によると176人の職工を要し、県下79の蚕糸製造所の中で2番目の生産高であった。その後、県下各地に工場を造り発展を遂げたが、第2次世界大戦の空襲で本社、津工場が全焼、



川喜田四郎兵衛
(出典:三重の電気史・中南勢版)

解散した。

さらに、1878(明治11)年に設立され、翌年営業を開始した第百五国立銀行の副頭取を経て1897(明治30)年、普通銀行に組織を変更した(株)百五銀行の頭取に就任した。

(2) 津電灯(株)の設立

津電灯は、1896(明治29)年に設立され、翌年津市で営業を開始した。創立時の社長は内田正雄で、その後、川喜田四郎兵衛が就任し

た。開始時の火力発電所の発電出力は、単相交流30kW、60kW×2、150kWの合計出力300kWであった。また当初の電灯点灯戸数は約320戸で、1ヶ月後には767戸に倍増し順調なスタートを切った。

その後、津電灯は、

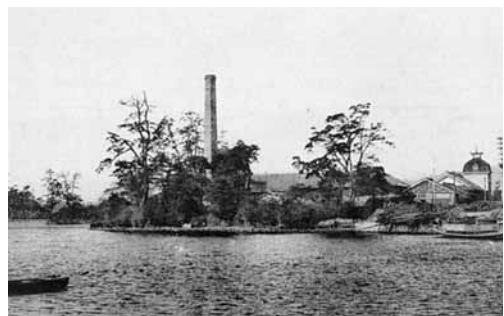
①1910(明治43)年：津電灯(株)を解散し、三重共同電気(株)と合併

②1911(明治44)年：津電灯(株)に名称変更

③1912(大正1)年：ガス事業部を設けガス事業を開始。そして、余剰ガスの利用と予備電力として、大正6年にガス第一発電所(出力：240kW)、大正8年に第二発電所(出力：200kW)を建設した。その後、合同ガス(株)を経て、2003(平成15)年に東邦ガスと合併した。

④1919(大正8)年：三重共同電力(株)設立。この会社は当時の津電灯(株)、松阪電気(株)、伊勢電気鉄道(株)、岩倉水電(株)、北勢電気(株)の5社が共同出資(資本金：100万円)して、各電力会社へ電力の融通を図るため、津電灯の関係会社として設立され、津火力発電所(出力：3,000kW)と波多瀬水力発電所(出力：800kW)を建設した。

波多瀬発電所は立梅用水の田畑かんがい用水を利用したもので、かんがい期間以外(毎年6月10日から110日間)や、かんがい期の夜間余水で発電する地元と共存共栄の発電



津火力発電所(中央の煙突)と本社屋(ドーム型の屋根)
(写真出典：三重の電気史・中南勢版)

所である。(2005年11月号：立梅用水を利用する波多瀬発電所を参照されたい)

津電灯(株)、百五銀行(株)などを引継いだ川喜田久太夫

川喜田久太夫は1878(明治11)年、15代久太夫政豊の長男として生まれた。翌年、父親を亡くし1歳で川喜田家16代当主となり、祖母政子の恩育と分家に当たる川喜田四郎兵衛の薫陶を受けた。

1919(大正8)年、川喜多四郎兵衛の没後に津電灯(株)社長、(株)百五銀行の頭取をはじめ地元産業界の役職を引継いだ。

(1) 三重合同電気、合同電気を経て東邦電力
大正後半から昭和初期にかけての三重県の



川喜田久太夫
(写真提供：財団法人石水会館)

電力会社は、三重合同電気(株)、合同電気(株)から東邦電力(株)へ合併をしながら大電力会社へ成長していく時期にあった。

①1922(大正11)年：三重合同電気(株)設立。津電灯、松阪電気、伊勢電気鉄道の3社は合併し、三重合同電気(資本金：1,250万

円)が設立され、川喜多夫が社長に就任した。

②1930(昭和5)年：合同電気(株)に改称。会長に松永安左工門、社長に太田光熙が就任し

た。この前年の昭和4年に東邦電力(株)奈良支店・四日市支店の電気事業及び関連資産の提供を受け資本金3,600万円に増資した。このように経営規模が近畿全般に亘ってきたので改称したものである。さらに1932(昭和7)年、東邦電力の三重県下の電気事業と合同電気の岐阜県下の電気事業とを相互に譲渡交換した。

- ③1937(昭和12)年：東邦電力(株)が合同電気(株)を吸収合併した。

(2) 財団法人石水会館の設立

川喜田久太夫は、実業家、津市市会議員・三重県県会議員などの政治家として多忙な日常の傍ら、川喜田半泥子として陶芸、書画、茶の湯、俳句など多彩な趣味を持つ文化人で、

中でも陶芸は「東の魯山人、西の半泥子」と称された。

1930(昭和5)年に私財50万円を寄付し、財団法人石水会館を津市に設立した。また、1942(昭和17)年「からひね会」を結成し、荒川豊蔵、金重陶陽、三輪休雪ら3人の人間国宝を支援した。そして1945(昭和20)年に百五銀行の頭取を辞任した後、自宅に広永陶苑を創設し、主に抹茶茶わんを制作した。おおらかで自由奔放な作風で、あくまでも趣味としての立場を貫き、出来上がった作品は友人、知人に分け与えたとされる。1963(昭和38)年、享年82歳で没した。

なお、川喜田四郎兵衛と川喜田久太夫の簡単な年表は次のとおりある。

川喜田四郎兵衛（1854～1919）

1854	安政 1	代々米穀、肥料、酒類を商う商家の長男として生まれる
1874	明治 7	家督を継ぐ
1893	明治26	津商業会議所創立 初代会頭に就任
1896	明治29	津電灯(株)設立、資本金：三万円、取締役就任
		関西製紙(株)初代社長に就任
1897	明治30	第五銀行頭取に就任
1919	大正 8	直腸癌で永眠

川喜田久太夫（1878～1963）

1878	明治11	父15代久太夫の長男として大阪市で生まれる
1899	明治32	早稲田専門学校卒業
1903	明治36	百五銀行取締役就任
1917	大正 6	津電灯(株)取締役就任
1918	大正 7	(株)川喜田商店社長に就任
1919	大正 8	百五銀行頭取(9月)津電灯社長(10月)に就任
1922	大正11	三重合同電気社長に就任
1930	昭和 5	私財五十万円を寄附し、財団法人石水会館を設立
1945	昭和20	百五銀行頭取を辞任し会長となる
1950	昭和25	百五銀行相談役に就任
1963	昭和38	老衰のため死去